

自殺の社会学的研究に関するメモ的考察

——主として、J. ダグラスの観点から——

藤 山 照 英

1. 関 心

わが国は、自殺の多い国である。自殺率だけでいえば、北欧や中欧の一部の国より低いけれども、アジアでは最高である。外国人の手による日本人論や日本文化論にも「ハラキリ」に代表される自殺の伝統の残存や、「一家心中」「母子心中」の社会的背景が論じられる。近年では、「受験競争」や「仲間いじめ」による幼少年児の自殺が報道されることが多い。われわれ自身の身近に自殺がおこりショックをうけた経験をもつ人も多いのである。それにもかかわらず、自殺にかんする関心はそれほど高くはない。死や自殺という現象はその独特な性格のゆえに、われわれはあまり深く考えようとはしないし、考えるには実に困難な問題なのである。自殺は社会のなかで目立たずひそかに起こる。ある意味で全く個人的現象であるがゆえに、一時的な波紋を起こしてもやがては社会生活の営みのなかで忘れ去られる。したがって、自殺現象は諸学問の対象に取り上げられることが比較の少ないテーマであると言えよう。

しかし、自殺は、古今東西、原始の時代から産業社会の現代まで至るところに見いだせる普遍的な社会現象であるから人々の関心の的であり、多量の考察や研究が蓄積されていることも事実である。自殺にかんする経験科学的研究は、18世紀末から19世紀にかけてはじまった。それは、当時のヨーロッパ社会の産業化、人口の都市集中、個人主義思想の蔓延によって、自殺者が各国で続発したことによるものであ

た。それ以前には、自殺にかんしては、宗教的、哲学的、あるいは法制的見解や研究が支配的であった。デュルケムの「自殺論」は、自殺現象をはじめて社会科学的立場にたって理論的に解明しようとする試みであって、それまでの社会科学研究を「総合」したものであり、またその後の社会学的自殺研究の「モデル」、「出発点」となったものである。

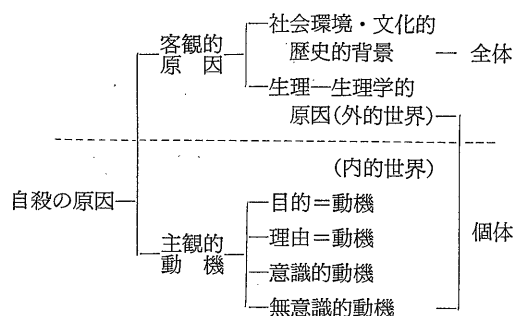
ところで、社会学が自殺を研究対象として盛んにとりあげたことには、単にそれが興味ある社会現象のひとつであったというだけではなく、実は、社会学という学問の根本的な性格と関連していたと思われる。デュルケムの「自殺論」はきわめて難解であり論争的であると言われるが、当時、デュルケムは社会学をひとつの独立学科として確立しようとしていて、それまでの人間現象にかんする哲学的見解と理論的に対決せざるをえなかったからである。まず、自殺は当時大きな社会問題であった。そして社会学はコント以来、社会の混乱時に実証的に全体を予見する試みとして成立してくる点。第二に自殺は当時まったく個人的な現象とみなされていたのに対し、デュルケムはその原因として個人をこえた社会的原因を指摘し社会的全体からの分析を示したが、自殺のような人間的現象を解明するのには、そのような方法だけで十分であるかどうかという社会学の方法論にかんする問題性をも残したのである。

2. 自殺学 Suicidology のバラエティ

自殺現象は複合的な現象であるから、自殺にかんする諸学問も多様である。自殺学の命名者

シュナイドマンは、自殺学に、精神医学、心理学、精神分析、社会学、社会病理学、社会統計

学などがふくまれるとし、その研究分野を、自殺の分布や実態の調査、自殺がなぜおこるかの理論的研究、自殺の予防活動の三部門にわけている。これは臨床的な場面での研究活動の分類であるが、自殺をきわめて人間的な現象とするならば、(1)生理的・身体的研究—うつ病や精神疾患として、(2)心理的研究—自殺傾向の心理的メカニズムやパーソナリティの問題として、(3)社会的・文化的背景の研究—家族や社会関係・社会状況・社会機構・宗教をふくむ思想状況などの研究がなされよう。自殺の原因を現象学的立場から総合的に捉えようとする加藤茂の分類によれば次のようになる¹⁾。



社会環境や歴史的背景に自殺の原因を探るのは社会科学であり、生理・生物学的レベルを担当する学問は医学や生命諸科学であり、意識や動機のレベルで究明するのは心理学であり、無意識層に降りたって自殺原因をたづねるものは精神分析である。

3. 自殺と自殺観

自殺現象はいつの時代にもみられたが、自殺のもつ社会的意味は異なっている。もちろん、実際には、どのような社会にもいろいろな種類の自殺があったであろうが、自殺の社会的観念は違っている。大ざっぱにいうと、古代社会では自殺に対して多様な考え方をしていた。自殺は不快なことであり、その蔓延を恐れる理由から非難されたが、一方では、自殺礼賛の思想や大いに称賛される場合もあった。中世になると、キリスト教の神学的立場から自殺は神の意志と愛に対する反抗としてもっとも罪深い行為

最後に、自殺現象の普遍性の根拠について。自殺がきわめて人間的現象であり他の動物に見られない行為であるとする、その普遍性の根拠は人間にだけあって動物にはないものにもとめねばならない。それは人間が意識的存在であるという点に求められる。動物もまた、意識をもつであろうが対象没入的である。人間のみが生活世界を対象化し彼の人生キャリアを全体として反省することができる。人間が意識的・反省的存在であることに自殺の普遍性の根拠があるのであろう。意識的存在であるということは、人間の栄光でもあるが、また人間の悲惨さでもある。自殺は根源的には、人間が意識において自由であることに根拠をもつからである。自殺は、それゆえ、「自由な死」Freitod とよばれてきた。そしてプラトンからカミュにいたる哲学の思索対象でもあった。実際の自殺にみられる生と死の複雑にからまった二面性も、同一状況において自殺する人としらない人があることも、このことに根拠をもつものである。また、自殺は、人間の生が意味を求める生であることにも根拠をもっている。意味とは、きわめて内面的で個人的なものである。意味と価値観は社会的なものではあっても、内面化され自己化されることによって人間のうちに保持される。「自殺とはこの人生が生きるに値しないことの告白である」というカミュの定義は不条理の実存の表現ではあっても、自殺行為が意味にかかわる行為であることを示している。

であった。社会の近代化とともに、自殺は人間の自由という観念から次第に寛容にみられるようになり、また人間性の観点から非難される。モンテーニュは「自分の金を盗んでも泥棒ではないように、自分の命を奪っても犯罪ではない」と言った。その代わり、自殺は次第に、意志の弱さのなせる業とか、愚かな行為であると考えられるようになる。もはや神に対する反逆ではなく、人間性を損なうこと、狂気の一環とみなされる。この自殺観の変化は、S. ピッケンによるとそのまま自殺を意味する言葉にも反

映しているそうである。フランス語の suicide はローマン・カソリックの唯一の公用語 suicido をそのまま継承しているし、ドイツ語の Selbstmord は18世紀の啓蒙期以降の語であるといわれる²⁾。

そのように、自殺の現象は歴史的に普遍的な現象ではあっても、その社会的・文化的意味はかなり違っていて、社会化されている自殺観によってしかわれわれも自殺を考えることができないのである。したがって、ある時代にみられた自殺がはたして自殺であるのかどうかという問題が生じる。たとえば、ダグラスによれば、殉教 martyrdom や自己犠牲による死は西欧の伝統的観念ではまったく自殺ではないし、日本の封建時代の「切腹」と現代社会におけるアノミー的自殺を同列に扱うことはできない。

さて、18世紀の啓蒙時代のヴォルテールは、新聞記事などを集めて自殺にかんする実証的・経験的研究を試み、自殺は農村より都市に多い。その理由は都市のもつメランコリーが人びとに抑圧的に作用して考える自由と時間をあたえるからだ。道徳性が遺伝するように自殺も遺伝する。復讐の自殺がある等と考えていた。19世紀は科学の時代であり、経験科学は各分野で急速に発展し、「事実」とか「物」とかが時代の合い言葉となった。社会の産業化、都市化、個人主義の風潮が多くの自殺者を生み、自殺にかんする科学的研究がそれまでの道徳や哲学的・宗教的見解にとってかわった。経験的研究には二つの流れがあり、一つはエスキロールをはじめとする精神医学、心理学、精神療法の流れであって、自殺を精神疾患とみなす立場であり、今ひとつは各国が各種の統計をとりだしたことによって、これらの公式統計 official statistics を

駆使して人間の生態を研究する moral statistics の流れである。(フランスの Guerry, Lisle, Legoyt, ベルギーの Quetlet, ドイツの Wagner, Masaryk, イタリアの Ferri, Morselli など)。かれらは自殺率と家族関係、人種、宗教、経済状態あるいは気候や地理的条件などとの相関関係の研究を進めた。moral statistician の最大の貢献は、「自殺率の規則性」regularity の発見である。しかし、かれらの研究は社会科学的是なものである。しかし、かれらの研究は社会科学的方法論をもたず、自殺現象を理論的に説明するにはいたらなかった。

さて、社会学の立場での自殺の研究をほぼ確定的な形で示したのは、デュルケムであるのはいうまでもない。かれは「自殺の社会的原因を特定の社会的文化的構造の特性に関連させて説明し、自殺への傾向をもつ社会集団の属性の類型論を展開した。この体系は以後今日まで経験的知見のめざましい拡大や社会学理論の進歩改善にもかかわらず、この課題にとりくむ今日の社会学的研究の基本的拠点としての意味をなんら失っていない。」³⁾ しかし、デュルケムの社会学の方法論の特殊な性格のゆえに、すなわち自殺を集団の規模で考察する視点からの理論化であるため、それを個人的行為の次元で究明する点に欠けるといわれる。つまりミクロな自殺研究の方法論をデュルケムからひきだすことはほとんど不可能であるといわれる。その後の自殺の社会学的研究の主流は、デュルケムの理論の精緻化であり、デュルケムの提示した諸命題を別な任意の領域で検証したり、あるいは自殺率の比較による解釈という方法論をさまざまな場合に適用することであった。

4. ダグラスの自殺理論とデュルケム「自殺論」の批評

一般に、社会学的研究の方法論として二つの立場がある。ひとつは社会を全体的なもの・集合的なものとして考察していく方法であり、今ひとつは、個人の社会的行為を軸に社会をそれらの相互関係の体系として理解していく立場である。前者は方法論的集合主義 methodological

collectivism とよばれ、後者の場合を方法論的個人主義 methodological individualism といわれる⁴⁾。自殺にかんする社会学的研究にもまたこの二つの流れを確認することができる。ひとつには、個別の自殺自為をとりあげその決定因子のうちとくに社会的因子を究明していく方法

であり、主として、これは事例研究 case-study の方法である。しかし社会学では、各事例の特殊因子には注目しないでとくに社会的側面の究明にあたる。そして個別的特殊な原因よりも可能な限り社会的背景といった一般的な方向にむかう。たとえばA氏の自殺の真因を、かれの家族関係、職場の人間関係、経歴、読書内容、思想・信条など、可能な限りA氏の全生活状況との関連から解明しようとするものである。今一つの方法は「大量観察」、すなわち各種社会集団のもつ自殺傾向性（正負ともに）や特徴を自殺率といった統計的資料にもとづいて数量的に観察していく方法である⁵⁾。後者の場合の典型的・代表的研究がデュルケムであったことはいうまでもない。

さて、本論文において、前者の方法論にたつて自殺の理論を展開していると思われる J. ダグラスについて、若干の考察を試みたい⁶⁾。

ダグラスは自殺の社会学的研究において、とくにその行為のもつ「社会的意味」 social meanings に注目する。個々の自殺事例をその社会的意味の文脈のうちで理解することをめざす。M. ウェーバーの理解社会学、すなわち社会的行為のもつ「主観的意味の理解」という方法論を自殺研究に適用する。自殺行為がもつ行為者および観察者にとって adequate (sinnvoll) とみなされる「意味の複合・意味の関連」としての自殺行為の「動機」に関心を寄せるのである。デュルケムは自殺の内面的な動機などは、もっとも曖昧なものとしたが、ダグラスでは自殺行為とは自己の死を意志する <willing to> ことであるから、もっとも重要な要素である。さて、自殺行為を観察し理解するさいの与件としてダグラスは動機 motives のほか、状況 situation, 自己 self, 物 things をあげる。かれにとって自殺行為のもっとも重要な特徴は、その有意味性 meaningfulness である。それは行為者の状況に「根本的に悪い何か」があることであり、行為者自身にとって「根本的な何か」を意味しているのである。「意味の複合」にかんしては、かれは、「意味の次元」という概念を提示する。意味の次元 dimensions の分析は動機のもつ内実 (imputations) を、その「属性」 properties と

「パターン patterns」に分析することである。自殺行為の普通の意味パターンとして、ダグラスは此の世から彼岸への魂の転成としての自殺、この世または彼岸において実質的自我を転成させようとする自殺、仲間感情（コミュニケーション）を達成するための自殺、復讐としての自殺の4つをあげている。またかれは、西洋社会における自殺のもっとも普通の意味パターンとして、同情、逃避、悔悟、贖罪、自責、誠実としての6つの自殺行為をあげている。

このような理論は、社会学での一般的な自殺研究にはなじまないものかもしれないが、似たような研究はフランスのパッシュレールにもあり⁷⁾、要するに自殺者にみられる主観の意味と第三者からする客観的解釈との乖離に目をむけるものである。自殺が「偉大な芸術作品を産み出すように魂の沈黙のなかで準備される」（カミュ）、特殊な行為であってみれば、こうした視点も大切であろう。主観の意味に注目するといってもダグラスの場合はそれを社会的・文化的コンテクストの関連で捉えようとしている。そして自殺の研究には、個々の事例を丹念に収拾することから始まるといっている。

つぎに、われわれにとって興味あるのは、ダグラスの自殺理論の学説史的研究の面である。デュルケムの「自殺論」の批評、ポスト・デュルケムの自殺理論の検討、公式統計の真疑性の問題、自殺情報にかんする問題と多面にわたるけれども、ここでは最初のデュルケム批判の点にのみ簡単にふれることにする。

ダグラスのデュルケム「自殺論」批判は、デュルケムの自殺理論への貢献まで否定するものではなく、その後のアメリカ社会学にあってデュルケムが「理論と実証の一致」とか、「調査的研究のモデル」とされていることへの批判であり、かれが自殺の社会学理論の大きな (grand) 概念を提示したが、その後の研究が、その可能性の限界をこえて進んだことへの批評である。また「自殺論」のみとりあげる場合と、デュルケムの他の著作との関連でそれを取りあげるのではパースペクティブは異なるという。とは言っても、ダグラスの批判はデュルケムの方法論の問題性に迫るところがある。まず、かれはデュ

ルケム「自殺論」を19世紀の自殺研究の学説史的流れのなかにおき、ついでその内容の詳細な検討にうつる。

「自殺論」は、ダグラスによれば、それまでの自殺研究の一種の「総合」の試みであって、moral statistics の経験的知見や世紀末文学の主人公の人間像などから多くのものを取り入れて発展させたものである。moral statistics の究明の対象であった「自殺率の規則性」は、デュルケムによって、社会が「超個人的な」the extra-individual 独自性をもつという観点に発展し、ラマルティースやシャトブリアンのロマン主義文学の主人公から、エゴイズムの自殺やアノミー的自殺という重要なキー概念を取り出した。統計を駆使する方法や、自殺が反道德的であるという観点も先行者から受け継いでいるという。

またデュルケムの「自殺論」の方法についてその弁証的性格を指摘して決して経験的でも実証的でもないと言っている。デュルケムは公式統計を検証せずにそのまま利用したが、それは自己の社会学理論の弁証のためであったという。

デュルケムが自殺現象の社会的要因としたものは、先述のように社会集団のもつ社会構造的・文化的なものであり、ひとつは社会統合性の social integration 強弱であり、今ひとつは社会規制 social regulation の強弱である。それによって起こる自殺の類型として、愛他的（集団本位的）自殺、利己的（自己本位的）自殺、アノミー的自殺、宿命的自殺の4類型をあげた。かれは、この分類を形態論的分类ではなく、原因論的分类であるとした。ところで、この点について、ダグラスによると、ほとんどの社会学者は、この社会的統合性-非統合性という言葉でデュルケムが何を考えていたかを究明しないで、そのままその名目をうけつづき、それを自殺現象を説明する客観的な変数として理解しているとして批判している⁹⁾。人びとは、それを単純に、客観的で外的な社会の状態と考えた。たとえば、それが政治的危機とか、経済的不況とかの社会の客観的な状態を意味すると考えたのである。ところで、社会の統合性から、自殺率

による自殺の分類にうつると、エゴイズム、愛他主義、アノミーをその結果としての自殺の異なるタイプとか、程度の問題であると受けとったのである。自殺の分類を、社会的統合性-非統合性との関連でとりあげてきたという。しかし、デュルケムは、実際には、社会の統合性-非統合性について明確な概念規定を行っていない。それはいろいろな表現で語られている。それは、社会的「一致」unity、社会的「凝集」cohesion、社会的「生命力」vitality、社会的「傾向」trend、社会的「力」force とか、さまざまに表現されている。

それは、おそらく「社会分業論」において展開された「集合意識」、すなわち、個人的意識を拘束し、それ自体外在的なものである「集合意識を指すものであろう。ところが、デュルケム以後の自殺の社会学的研究は、デュルケムの社会学方法論の一方の側面のみ強調することとなった。ダグラスによれば、自殺の社会的要因は、デュルケム以後（主としてアメリカ社会学での自殺研究）、社会の客観的な状況、あるいは行動の次元でのみ追求されるようになったという。すなわち、デュルケム社会学の実証主義的側面、統計的手法、数量的測定 of 側面のみが追求されて、人間を自殺へ追いこむ社会の客観的諸条件の研究となっていったと論じている。たとえば、社会的統合性について、1) 一定の時期において相互作用のある個人の数、2) 相互作用の頻度、3) 質的に違った諸関係の類型の数、4) それぞれの相互作用にみられる親密さの程度といった、人間の行動の次元に自殺の社会的要因を求めることになった。そこで、統合性-非統合性の程度によって、エゴイズムの自殺、愛他的自殺、アノミー自殺が測定されるようになる。その一般的な解釈は、次のようである⁹⁾。

- 1) 形態論的要因が、社会的相互作用の一定の程度とパターンを決定する。
- 2) 社会的相互作用の程度とパターンが、社会統合の一定の程度を決定する。
- 3) 個人の状態あるいは社会の状態のいずれかによって明らかになる社会的統合性は、個人の社会への結びつきの強さであると定義される。

- 4) 結びつきの強さは、エゴイズム、愛他主義、アノミーの語によって説明され、あるいは、結びつきの強さは、エゴイズム、愛他主義、アノミーの一定の程度であると仮定される。
- 5) エゴイズムは、生活に意味と目標を与える社会的・集合的活動性の相対的欠落であり、愛他主義は、社会的活動性の相対的な過剰である。アノミーは、無限に増大する個人的パッションを制限する社会的活動性の相対的な欠落である。
- 6) 結局、エゴイズム、愛他主義、アノミーのそれぞれの程度の一定のバランスが、特定社会の特定自殺率の原因である。

以上は、デュルケムの「自殺論」をモデルとした自殺研究者（主として、アメリカ社会学の）考え方を述べたのであるが、ダグラスは、デュルケムが果して、自殺の社会的要因を、行動主義的な客観的な条件として考えていたかどうかを問題とするのである。デュルケムは、もちろん、社会を「もの」として、社会的現象は社会的事実に説明を求め、個人をこえた社会的ものの影響を論じているけれども、その後の自殺研究では、デュルケムのそうした傾向をあまりにも機械的 *mechanistic* に、過大に説きすぎる *overstate* として批判する。

社会の統合性についての、ダグラスの指摘するデュルケムの問題点は、要約すれば次のようになる。「基礎的な問題点は、きわめて単純である。すなわち、デュルケムの自殺理論において、社会的行動が当の感情や道徳（エゴイズム、アノミーなど）の、したがって自殺の原因であると論じられているのか、あるいは反対に、社会的意味が社会的行動の、したがって自殺の原因とされているのかということである。」より簡単に言えば、デュルケムは、「自殺は結局、社会的意味によっておこるのか、あるいは社会的行動によっておこるのか。」という問題である¹⁰⁾。

デュルケムが、社会の統合性について、さまざまな表現で論じていることは先に述べたが、デュルケムは、社会学の課題を〈個人と社会の

関係〉という図式において、主として、その社会的側面を強調したけれども、社会そのものを精神的、道徳的な存在として考えていた。「集合意識」、「集合表象」という言葉が、最もそれをよく表していると思われる。自殺の社会的要因（自殺論第二編）において、宗派、家族、職業集団、政治社会などの自殺率による原因の検証を進めているが、そこでの社会的統合性の強弱は、たとえば、宗派の組織上のことよりも、「自由検討」（プロテスタント）とか「共通の信条」（カトリック）に重点をおいていいあらわされている。社会の統合性は、さまざまに表明されているのであって、自殺率の原因としてあるところでは、精神的な社会的意味的なものが強調され、しかしあるところでは、構造的なものが指摘されているのである。愛他的自殺と汎神教的信仰との関連を論じたところで、「汎神論的社会構造」という表現が用いられているが、それは一種のタウトロジーである。

さて、デュルケムの自殺理論は、自殺のさまざまな社会的原因論を提示したのである。それは社会統合性であれ、社会的規判であれ、しかし、きわめて一般的レベルのものである。社会的統合性の強弱ということだけでは、あまりに一般的抽象的すぎて、個々の自殺行為を説明するにはあまりにも、蓋然的である。そこから、デュルケムの自殺理論について、さまざまな批判がなされた。デュルケムでは、自殺の社会学的原因としての社会的統合性、社会的規判を測定する規準を示さなかったこと、社会的統合性の欠落が、他の逸脱行為ではなくて自殺行為に結びつくかの因果関係を説明しなかったこと、あるいは、社会的統合性と、社会的規判とをどのように区別するかなどの問題を残しているのである。

また、デュルケムの自殺理論の一般性のゆえに、彼の示した自殺に関する諸命題は、必ずしも経験的事実に合致しない多くの点も指摘されよう。たとえば、自殺と経済的貧困との関連、自殺と精神的疾患との関連、自殺における男女性比についての見解（デュルケムは自殺の原因を社会的活動性に求めているので、女性は比較的自殺しないとしている。しかし、デュルケムの時代では、女性は家族の中の存在だからであ

ろうが、現在は必ずしもそうではない。そしてまた、女性には自殺未遂が多く、家庭内にあって、決して社会性が欠落しているわけではないと思われる。デュルケムには、かなり女性に対する偏見がみられる。) 自殺は都市的現象だとし、また自由業に多いとしている点も、日本の場合などには必ずしもあてはまらない。自殺と宗教との関係についても、すでにアルバックスの批評があるように、宗派による統合性だけからでは論じられないなどである。さらに、デュルケムは、当時までに集積されていた公式統計を駆使しているけれども、公式統計そのものにふくまれている問題性については何ら顧慮していない。検死官による自殺動機の分類については疑問を投げかけてはいるが、現場における自殺の定義の問題とか、検死官による処理の仕方にかかわる問題とか、自殺統計における暗数の問題とか、地域による収計の問題などについてはほとんど知るところがなかった。デュルケムは、この点、書斎の中の社会学者にとどまったのである。

また、デュルケムの自殺の定義にふくまれる問題も指摘されよう。自殺に関する常識的見解

を整理したあと、デュルケムは、「死が本人自身によってなされた積極的、消極的な行為から直接的、間接的に生じた結果であり、しかも本人がその結果の生じうることを知っていた場合をすべて自殺と名づける。」としているが、この定義はあまり広範すぎる点がまず指摘されよう。これでは、一般に自殺的行為と呼ばれるものが、すべてこの定義のうちに入ってしまう。しかし、それよりも、この定義にふくまれる問題点は、デュルケムが、自殺の行為者が行為の結果を予知している点を強調して、知識の問題に還元している点である¹¹⁾。それは、デュルケムのきわめて近代的で知的な人間観にもとづくものであるが、問題はデュルケムが「自殺論」において自殺行為のもつ動機 motives とか「意図」 intentions とかいう内面的なものを重視しなかったことを示している。人間の動機とか意図といった、目的論的行為論を彼がさけた点である。デュルケムは、このような自殺の定義から自殺を社会的次元からのみ(個人的次元を無視したわけではないとしても)、それが、きわめて人間的な現象であることを見ようとしなかったと言えるかもしれない。

注

- 1) 加藤茂「人間はなぜ自殺するか—その現象学的な考察—」勁草書房、p. 110~112.
- 2) スチュワート・ピッケン「日本人の自殺—西欧との比較—」(堀たお子訳)サイマル出版会、p. 26~p. 29.
- 3) 中久郎「社会学における自殺理論の検討」社会学評論、15: 4、p. 30.
- 4) 倉橋重史・丸山哲央編著「社会学の視点—行為から構造へ—」ミネルヴァ書房、p. 16.
- 5) 中久郎: 上掲論文、p. 31.
- 6) ダグラスは、現在、アメリカ、カリフォルニア大学の社会学部教授、自殺に関する著者としては次のようなものがある。
The Sociological Study of Suicide: Suicidal Actions as Socially Meaningful Actions. Ph. D dissertation, Princeton Univ. 1965.
The Sociological Analysis of Social Meanings of Suicide. Archives evropéennes de sociologie 7. 1966.
The Social Meanings of Suicide: Princeton Univ. Press 1967.
The Social Aspects of Suicide. in The International Encyclopedia of the Social Sciences: Crowell-Collier.
7) 池田豊正「自殺と文化」筑摩選書、
8) J. Douglas; The Social Meanings of Suicide p. 37.
9) ibid. p. 39~40.
10) ibid. p. 41.
11) J. Douglas; The Social Aspects of Suicide